新聞掲載関連記事一覧

１．京都府

（１）平成２７年１０月１８日（日）　京都新聞朝刊２５面

岩尾さん（左から5人目）の指導を受け、スティックを操る生徒たち＝京丹波町豊田・須知高

ホッケーで技と心育もう

東京五輪へ 元日本代表京丹波で指導

「夢や目標が生きる力に」

2020年の東京五輪を見据えた選手育成と人間性を育もうと17日、京丹波町豊田の須知高でホッケー女子の元日本代表、岩尾幸美さん（39）＝大分・ここのえ緑陽中教諭＝の講演と実技指導が行われた。同高と同町内にある中学校、スポーツ少年団の小学生計80人が手ほどきを受けた。

友情や努力の尊さなどを学ぶ「五輪教育」の醸成を目的とする府教委の調査研究事業。国際オリンピック委員会（IOC）認可の五輪研究センターがある筑波大の提案を受け、府内で初実施した。

岩尾さんは04年のアテネから3大会連続で五輪に出場した。高校でホッケーと出会い、五輪出場の夢を見つけるまで平凡だったという。講演で「夢や目標、目的があれば頑張る力になり、生きる道になる。それを進めば人と出会え、世界が広がる」と、ひたむきな姿勢の大切さを説いた。

ホッケー練習場では「周りを見てからパスしよう」など基礎を伝授。須知高2年の谷垣七海さん（17）は「ホッケーや日常生活に生かしたい。今の夢は京都で1番になること」と笑顔で話した。（内川和則）

（２）平成２７年１１月１日（日）　京都新聞朝刊ジュニアＢ１４面

教える 伝える

夢へ！諦めずに走り抜こう

ソフィアがやってきた！

集中すればすごい力が湧いてくる。「ソフィア」がやってきた！第281回は、世界陸上選手権アテネ大会女子マラソン日本代表の比護信子さんが京都市立南太秦小学校を訪問。6年生51人に、カードのメンタルトレーニングをまじえ、数々のレースを戦い抜いて培った気分ほとばしる熱血の生き方を伝える。それは、夢に向かって諦めず、挑戦と努力を積み重ねる日々の大切さ。児童の心の中に、将来への何かがしっかりと像を結び始める。

今週のせんせい

世界陸上選手権アテネ大会女子マラソン日本代表

比護 信子 さん

京都市立 南太秦小学校

ひご・のぶこ　亀岡市生まれ。旧姓、藤村（ふじむら）。大阪体育大学卒業後、ダイハツ工業に入社。1993年、大阪国際女子マラソンで初マラソン。翌年の同大会で当時日本最高タイム（2時間26分09秒）を記録、2位に。同年、広島アジア大会で銅メダル。96年、東京国際女子マラソン優勝。97年、世界陸上アテネ大会10位、団体優勝。母校の京都府立南丹高校教諭を経て2015年から、府教育庁スポーツ振興担当指導主事となり22日の「女性スポーツフォーラム」を担当。「『東京オリ・パラ』盛り上げのきっかけに」と張り切る。

行ってきました

「このカードで、集中力を高めるトレーニングしてみましょう。集中力が高まると、自分の力が十分に発揮されますよ」（7月24日、京都市右京区・京都市立南太秦小学校）

では、最初に映像を流します。先生が、昔、マラソンでどんな活躍をしたのか、今から20年ほど前、広島でのアジア大会で3位になったころとか、世界陸上アテネ大会での様子が映っています。今、着ているユニフォームはレザーは、広島のアジア大会日本代表のユニホームなんですよ。それと、アテネ大会の国別対抗戦で優勝してもらった金メダルも持ってきました。後で、見てもらいますね。

さあ、映像はどうでしたか。華やかなレースとその裏で続けてきた、厳しいトレーニングも映っていましたね。マラソンは、目標の大会の2、3月前から本格的に練習に入ります。映像にあったように、アメリカの標高2千メートルの高地で走ったりしました。普通、1日、朝夕2回、合わせて40キロを走ります。本番に臨むこの間は、体調を崩してしまったり、思う結果が出ないとか、なかなか大変なんですよ。

マラソンは、42・195キロを2時間ほどで走ります。それで、走りだして、意識があるのは、最初の1時間ほど。気がついたらもう半分が過ぎていたというような感じになります。キャプテンはみんなにこの用紙を配ってあげてください。みんなは、その紙に、挑戦したい目標を五つ書きます。もちろんスポーツ以外もOK。ただ、人のまねはしないでね。…。

さあ、どうでしょう。書けていないもいますね。でもいいんです。ほんとに今、何に挑戦していいかわからない人もいるだろうし、そうでなくても、具体的なイメージを頭に描くというのは難しい。それを文章や絵にするのはさらに難しい。先生は、どうだったかというと、小学生の時、勉強では、三もしゃべれないほどの内気。でも、走ることは大好きで、男の子に負けないぞと、がんばりました。好きなことは、絶対諦めない。高校からはマラソンに憧れ、世界でメダルを取ることを夢見て、がんばり、それを実現したわけです。将来は確かにわからないけど、目標を思い、挑戦し続ければ、その通りになっちゃうものだと思います。だから、集中して挑戦する目標をイメージするんです。

背伸びすると、フレッシュな気分に

何か、心が落ち着くね

おお、不思議。赤い葉っぱがくっついて四つ葉のクローバーに

心が落ち着くと目標が浮かんできたよ

それでは、これから、心がリラックスして集中でき、目標が頭の中に浮かんでくるような実験をやってみましょう。カードを使ったエクササイズです。最初は、クローバーの上に、赤い葉っぱが1枚書いてあるカード。その赤い葉っぱにある白い点を目を移します。さあ、どうか、20秒したら、クローバーの中の黒い点に目を移します。さあ、どうかな？　不思議、不思議。赤い葉っぱがクローバーにくっついても変わり、四つ葉のクローバーになってしまいましたね。もう一つ、十字架の絵のカード。これも、同じように、やってみてください。

どう、心が落ち着き、集中力が高まってきませんか。ね、そう感じたでしょう？　実は、みんなの脳波は、今、α（アルファ）波が出ている状態になっているはずなんです。ものごとを考えたり、しようするのにとてもいい。そのことを、きょう持ってきた装置で測定することができます。では、もう一回カードを使ってから、誰か前に出てきてくれますか。脳波を調べてみましょう。はい、リラックスして、自分の好きなこと思い描いてね。あー、ほら、α波が出ました。7・15ヘルツのあたりで、とっても いい具合ですね。

このカードで訓練したり、自分の好きなことをしたりすると、憂鬱みなんかも吹き飛び、脳はリラックスしたいい状態になります。では、さっき思い浮かんだ人もそうでなかった人も、カードで集中力を高めてもう一度！　挑戦する目標をイメージし、絵に描いてみましょう。

◇◇◇

この後、比護さんは、18歳の時に描いた、自分がゴールを切る絵を児童に見せ「この絵、最初の映像と同じでしょう？　18歳で思い描いたことが、30歳で実現したんです」と。そして感動、健康、向上、挑戦など七つの「スポーツ心」を紹介し「小さな目標を積み重ね、努力を忘れず大きな夢に向かって進んでほしい」―児童に力強く言葉を贈る。

（文・辻恒人、写真・熊谷修）

せんせい答えて

印象に残る世界レースは？

Q どうしてマラソンを始めたの。

せんせい きっかけは京都の都道府県対抗女子駅伝です。どうしても出たいと思い、選考レースに出て優勝、これで長距離のとりこに。

Q 印象に残る世界レースは。

せんせい やはり、1997年、アテネでの世界陸上ですね。エーゲ海がきれいで、両親も見に来てくれ、そんな中で走れる幸せを感じました。

Q 走り切った時の気持ちって。

せんせい 結果が出た時は「よし、次もがんばろう」って、目標が自然にわいてきます。

Q 練習では何を心がけましたか。

せんせい 練習はうそをつきません。何が大事かを頭において、最後までやりとげます。絶対手は抜きませんでした。

Q 一番しんどかったこと。

せんせい 1994年のアジア大会。もう一人の代表が奮起し、一人で日の丸を背負うプレッシャーで体調を崩してしまい苦しいレースでした。でも、決して諦めずに走った。それが3位というごほうびにつながりました。

授業を終えて

メンタル面の話は難しかったと思いますが、みんな、しっかり聞いてくれ、すごく丁寧に対応してくれましたね。目標を決め、どんなことでも集中して諦めることなくやりとげる。この思いで努力を続ければ、きっといい結果が得られます。（比護信子）

次回は「暮れの科学」（京都大学大学院人間・環境学研究科教授・阪上雅昭さんが京都市立七条小学校を訪れます。

京都市立南太秦小学校　1974年、太秦小学校から独立開校。学校教育目標は「進んで学び、心豊かでたくましく生きる子ども―子どもたちが輝く学校づくり」。「おはよう　なかよし　やりぬく子」を合言葉に、毎朝、校庭でラジオ体操を行い、児童一人一人の継続する力を養う。児童数304人、清水淳一校長。京都市右京区太秦前ノ田町22。

（３）平成２７年１１月１日（日）　京都新聞両丹Ａ朝刊２４面

府立高と支援学校 絆強く　与謝野で交流会

丹後地域の高校生に踊りを披露する与謝の海支援学校の生徒たち（与謝野町男山）

丹後地域の府立高と与謝の海支援学校高等部の交流会が31日、与謝野町男山の同支援学校であった。生徒たちが意見発表や吹奏楽部の演奏、踊りなどを通じて親交を深めた。

丹後府立学校校長会が毎年この時期に催しており、28回目を迎えた。9校から計162人が参加した。

最初の全体会では、久美浜高生と同支援学校の卒業生が、バリアフリーや仕事に関する意見を発表し、思いを参加者に伝えた。

続く文化の集いでは、加悦谷と峰山、久美浜3高の合同吹奏楽部が「風になりたい」「栄光の架橋」「世界に一つだけの花」などを演奏。同支援学校の生徒は「与謝の海ソーラン」を力強く踊った。

卓球台を使い、いすに座って球を打ち合うスポーツ「卓球バレー」やフォークダンスなども行われ、生徒たちは多彩な企画を楽しみながら交流の輪を広げた。

（大西保彦）

障害者スポーツで交流

精華　南山城の５高と支援学校の生徒

南山城地域の高校と南山城支援学校高等部の生徒がスポーツを通じて交流する催しが7日、精華町山田の同支援学校であり、共に体を動かし親交を深めた。

地域交流を目的に毎年開催しており、南陽、木津、田辺、久御山、京都廣学館の5校と同支援学校の約175人が参加した。府のオリンピック・パラリンピック教育モデル推進校に指定されている同支援学校が、障害者スポーツを広く知ってもらおうと企画した。

転がしたボールを的に近づけて点数を競うボッチャや、卓球台を使い、椅子に座ってピンポン球を打ち合う卓球バレーのほか、ボウリングや輪投げなどを楽しんだ。

同支援学校2年の二渡正樹君（16）は「みんなで協力してできたので面白かった」と話し、京都廣学館高3年の八木香央里さん（18）は「初めてボッチャを知った。一緒にやってみると、とても楽しかった」と笑顔だった。

（杉原慶子）

障害者スポーツのボッチャを楽しむ生徒たち
（精華町山田・南山城支援学校）

（５）平成２７年１１月２０日　京都新聞朝刊１９面

女性アスリート京で指導考える

22日にフォーラム

女性アスリートの競技環境や指導を考える「京の女性スポーツフォーラム」が22日午後1時半から、京都市下京区の京都産業会館で行われる。ソウル五輪シンクロナイズドスイミング銅メダリストの田中ウルヴェ京さんによる講演などがある。

京都府教委などが2020年の東京五輪・パラリンピックに向けた教育、調査事業の一環として、ジュニア選手や指導者らを対象に開催する。

田中さんの講演の後、国立スポーツ科学センター長の川原貴氏をコーディネーターに、シンポジウムを行う。アテネ・北京五輪バレーボール代表の大村加奈子北嵯峨高教諭や、仁川アジア大会の水球女子日本代表監督を務めた藤原秀規・鳥羽高教諭ら指導者をはじめ、重量挙げ日本高校記録保持者の柏木麻希(早大、鳥羽高出)、産婦人科医も参加する。

無料で申し込み不要。問い合わせは府教委保健体育科☎075（414）5864。

女性アスリート 競技環境考える

京でフォーラム

女性アスリートの競技環境や指導のあり方を考える「京の女性スポーツフォーラム」（府教委など主催）が22日、京都市下京区の京都産業会館で開かれた。女子学生や指導者ら約400人が、試合で実力を発揮するためのメンタルトレーニングや、月経など女性特有の悩みとの付き合い方を学んだ。

ソウル五輪シンクロ銅メダリストでメンタルトレーナーの田中ウルヴェ京さんが講演。自らの経験を基に、自分の感情を客観的に説明できるとリラックスできるようになると説明し「適度な緊張がないと実力は出せない。自分が緊張していると認め、見つめ直すことが大切」と話した。

シンポジウムでは、重量挙げ日本高校記録保持者の柏木麻希（早大、鳥羽高出）ら7人がパネリストを務めた。月経痛の競技への影響が話題に上がり、産婦人科医が、ピルは月経が競技日に重ならないように調整できドーピング禁止物質にも該当しないのに、日本ではまだ普及していないと現状を報告した。

（田中俊太郎）

女性アスリートの競技環境などについて話し合うパネリストたち（京都産業会館）

（７）平成２７年１２月１８日（金）　京都新聞朝刊２７面

目標達成への努力大切

パラリンピック競泳メダル21個の河合さん

綾部高で講演　仲間の存在も重要

パラリンピックに６回出場し、競泳で金５個を含む21個のメダルを獲得した河合純一さん（40）が17日、綾部市岡町の綾部高で講演し、約１２０人の生徒に目標達成に努力する大切さを説いた。

河合さんは大学卒業後に全盲の人として全国初の普通学校教諭になったことや、５歳で水泳を始めたこと、出場したバルセロナ大会（１９９２年）以後のパラリンピックを振り返り、夢に向かって勉強や練習に打ち込んだことを語った。

金メダルを生徒たちに示し「自分で限界を決めず、目標を見つけたら具体的イメージを持って努力すること、応援しともに喜んでくれる仲間が重要だ」と呼び掛けた。

校内の温水プールでは、同高水泳部員のほか中丹地域の支援学校高等部などの生徒も対象に泳ぎを指導した。（村尾之範）

「自分で限界を決めず努力を」と呼び掛ける河合さん（綾部市岡町、綾部高）

オリンピック・パラリンピック テーマ

高校生の短歌作品募集

京都府教育委員会などは２月11日に開く「オリンピック・パラリンピック教育フォーラム2016in京都」に合わせ、「京都府高校生短歌コンクール～オリンピック・パラリンピック讃歌～」の作品を募集している。

対象は府内在住か、府内の高校や特別支援学校高等部に在籍する生徒で、個人のほか学校単位でも応募できる。募集する短歌は、スポーツを「する」「観る」「支える」観点からの感動を表現した作品。１人３首までで未発表のものに限る。

専用の応募用紙に必要事項を記入の上、〒604―8567　京都新聞ＣＯＭ「京都府高校生短歌コンクール」事務局宛てに郵送する。締め切りは１月12日（当日消印有効）。応募用紙は京都府教委高校教育課ホームページからダウンロードできる。優秀作品は、金剛能楽堂（京都市上京区）で行われる「教育フォーラム」で表彰される。

問い合わせは、「京都府高校生短歌コンクール」事務局（京都新聞ＣＯＭ内）kyo-tanka@mb.kyoto-np.co.jp

（９）平成２８年２月１２月（金）　京都新聞社朝刊１９面

スポーツ短歌 高校生表彰

上京でフォーラム

2020年東京五輪・パラリンピックに向け、スポーツと文化を融合した取り組みを京都から発信する「教育レガシー共創フォーラム」が11日、京都市上京区の金剛能楽堂で開かれた。高校生がスポーツをテーマに詠んだ短歌のコンクール受賞式や、五輪選手らによる講演が催された。

コンクールには府内の高校生1567人が2415首を応募し、15作品が入賞した。最優秀賞は、男子バレーボール部マネジャーの心情を表した「笛が鳴（ベンチ）から聴く」。りコートに駆け出す足音を近くて遠い此処」田栞里さん（16）＝左京区＝は「驚きました」が、共感してもらってうれしかった」と笑顔を見せた。

スポーツをテーマに詠んだ短歌コンクールで表彰状を受け取る高校生たち（京都市上京区・金剛能楽堂）

講演では、小学2年で遭った交通事故の後遺症を乗り越え、北京五輪シンクロナイズドスイミング代表になった石黒田美子さん（32）＝奈良市＝が「スポーツでなくとも夢に向かい、希望に向かい進んでほしい」と生徒らにエールを送った。

フォーラムは、府教育委員会などが初めて催し、府内の生徒ら約200人が参加した。東京五輪に向け、来年度以降も高校生の短歌コンクールなどを続けていく方針。（日山正紀）

２．福岡県

（１）平成２７年１０月２１日（水）　西日本新聞朝刊２３面

はなしの横丁

地。地元の特産野菜に親しんでもらおうと、11年前から枝豆収穫体験をしている。

園児たちは刈り取った至を手に、「この豆大きい」「早く食べたい」と話しながら、膨らんだ豆のさやを一つ一つむしって収穫した。

〈新宮〉立石選手が新宮東小で夢トーク

卓球選手としてパラリンピック出場を目指す福岡市博多区の立石アルファ裕一さん(31)の特別授業「ドリームトーク」が15日、新宮町の新宮東小で6年生148人全員を対象にあった＝写真。国際大会で上位入賞の活躍を続ける立石さんは「一緒に夢を持とう」と呼びかけた。

立石さんはつま先に力が入らない先天性の障害があり、ふくらはぎの筋肉が発達していないため、足を使った速い動作ができない。授業では「パラリンピック出場の夢を実現し、自分がやることでほかの人たちにも頑張ろうという気持ちになってほしくて、卓球を続けている」と話した。

パラリンピックと五輪にはボールパーソン、通訳、会場設営など多様なスタッフが必要なことも紹介。「東京で五輪とパラリンピックがある2020年に向けて、みんなが夢を持ち、達成のため頑張ってくれたらうれしい」と力を込めた。

堺美彩さん(11)は「私も一生懸命、自分の夢に向かっていきたい」と話した。

（２）平成２８年１１月１８日（水）　西日本新聞社筑豊版２４面

ブラインドサッカーを体験

アイマスクを着けた児童と着けていない児童が手を握って体験したブラインドサッカー

田川小児童 アイマスク着け

視覚障害者の思い学ぶ

音と声を頼りにボールを操る視覚障害者のスポーツ「ブラインドサッカー」の体験教室が12日、田川市立田川小であり、4年生34人が参加した。

ブラインドサッカーは鈴入りのボールを使い、監督らの声も頼りにプレー。日本代表は2014年の世界選手権で過去最高の6位に入った。16年のリオデジャネイロ・パラリンピック出場は逃したものの、20年の東京パラリンピックでの活躍が期待されている。

同小では、九州ブラインドサッカー協会（福岡市）の堀田幸作理事(36)や九州唯一のチーム「ラッキーストライカーズ福岡」の森良太選手(31)が指導。2人一組になった児童は、交互にアイマスクを着けて相方に導かれながら、階段の上り下りや障害物をよける歩き方を練習。ドリブルや試合も体験した。

巧みなドリブルやミドルシュートを披露した森選手は「私のように目が不自由でもサッカーができる。みなさんも自分の目標に向かって頑張って」と呼び掛け、堀田理事は「どういう接し方をすれば視覚障害者が安心するか分かったと思う。普段、友達と接するときにも生かし、思いやりを大切にしてほしい」と話った。

併見萌衣さん(10)は「アイマスクを着けて歩くのは怖かった。(視覚障害者に)道で会ったら、何か困っていることがないか声を掛けたい」と話した。

（中川博之）

（３）平成２８年１月１４日（木）　西日本新聞北九州版２２面

ブラインドサッカー アビのコーチと体験

岡垣町戸切小

2020年の東京五輪・パラリンピックを目指す、スポーツを通じて子どもの人間性を育もうと、岡垣町の戸切小（松山時雨校長、78人）で13日、視覚障害者向けの「ブラインドサッカー」の体験教室があった。全児童が参加し、J1のアビスパ福岡のコーチからルールを学んだ後、目隠しをしてプレーに挑んだ。

国の「オリンピック・パラリンピック教育推進事業」の一環で、毎年に実施する岡小などが企画した。

アイマスクを着け、ペアで声を掛け合いながらボールをキャッチする戸切小の児童

ブラインドサッカーは約人指す競技。パラリンピックの正式種目で、16年のリオデジャネイロ大会の出場は逃したが、20年の東京大会での活躍が期待されている。

同教室では児童たちは2人一組となり競技を体験。ゴールキーパー以外は手を使えないが、この日は特別に転がってきたボールをキャッチするなどして楽しんだ。

藤井健コーチは「協力しあえばサッカーができる。みんなも個性や障害を認め、助け合ってほしい」と呼び掛けた。6年の花田瑠花(12)は「目が不自由な人の大変さが分かった。町で見かけたら自ら声掛けなど思いやりがある行動をしたい」と語った。

（宮下雅夫郎）

（４）平成２８年１月１９日（火）　西日本新聞朝刊２７面

英パラリンピック委のトップ
北九州で交流や視察

英国パラリンピック委員会のティム・ホリングスワース最高経営責任者（CEO）が18日、北九州市の招きで同市を訪れ、パラリンピックスポーツを紹介する交流事業や講演会を行った。2020年の東京五輪・パラリンピックのキャンプ誘致決定に向けて、同市内のスポーツ施設など6カ所も視察した。

キャンプ招致を目指す北九州市は昨年、ローレンス・チヴァスを北九州英国名誉領事を参与に起用。東京五輪・パラリンピックや19年のラグビーワールドカップ（W杯）日本大会のキャンプで、英国チーム誘致を進めていることもあり、同CEOの訪問が実現した。

ホリングスワースCEOは、県教委の「オリンピック・パラリンピックムーブメント調査研究事業推進校」に指定されている西小倉小（同市小倉北区）を訪問。12年のロンドンパラリンピック金メダリスト小谷正行さん（40）＝福岡市＝らが講師を務め、目隠しした3人一組同士がゴールを狙う「ゴールボール」の体験授業を見学した。児童約100人との対話形式の授業では、CEOは「スポーツは社会をより良い方向に変える可能性を持っている」「障害がある人に勇気や刺激を与えたい」と話した。

4年の後輩講師石(10)は「投げ方を教わりにボールを止めるゴールボールは難かった。パラリンピックに出る選手はすごいなと思った」と話していた。

小学生と交流する英国パラリンピック委員会のティム・ホリングスワースCEO（上段左から2番目）

（５）平成２８年１月２８日（木）　朝日新聞朝刊２９面

「おもてなしの心」テーマに特別授業

「オリパラ」推進校・豊前の角田中

「おもてなし」について話す江上いずみさん＝豊前市の角田中学校

東京オリンピック・パラリンピックの成功に向けて文部科学省が進めるオリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業の一環で、「オリパラ」教育の実践的な調査研究の推進校になっている豊前市の角田中学校で27日、全校生徒を対象に「おもてなしの心」をテーマにした特別授業があった。

生徒と教職員約50人が参加。日本航空で30年間にわたって客室乗務員として勤務した筑波大大学院客員教授の江上いずみさん(54)が航空機内での体験などを基に話をした。

江上さんはおもてなしの心について「見返りや対価を求めない、日本が世界に誇る文化」「相手から感謝の形で返ってくる」「福岡の文化を世界にアピールするにも必要」などと説明。「尽くし上手、尽くされ上手な日本人になって下さい」と語りかけた。

（小浦雅和）

」

（６）平成２８年２月５日（金）　西日本新聞都市圏版２４面

はなしの横丁

〈西区〉

パラリンピック金メダリストに生き方学ぶ

福岡市西区の玄洋高校で1月27日、「人権・同和教育講演会」があった。2012年ロンドンパラリンピックのゴールボールで金メダルを獲得した小宮正江さん(40)が「障がいと向き合って」と題して講演し＝写真、1、2年生604人が耳を傾けた。ゴールボールは3人一組で対戦。全員が目隠しをして鈴入りのボールを投げて互いのゴールを狙う。

小宮さんは小学生の時に網膜色素変性症を発症。視力が悪化する中、障害児のボランティアに参加して障害のない子どもの笑顔に触れ、「障害って個性と思った」という。大学4年時にゴールボールに出合い、世界一を目指した経験を交え、「やってやれないことはない。やらずにやれることはない」と語り掛けた。2年の国分瑞依さん(16)は「夢を見つけたら、私も諦めずに頑張りたい」と話した。

（７）平成２８年３月２日（水）　西日本新聞朝刊２５面

筑紫野中

「夢を持ち人生変わった」

視覚障害ランナー道下さん講演

一方が目が見えない状態でロープを握り合って走る難しさを体験する生徒と講師の道下さん（中央）

今年9月のリオデジャネイロパラリンピック視覚障害女子マラソン日本代表候補、道下美里さん(39)と伴走者の堀内規生さん(35)が2月25日、筑紫野市針摺東の筑紫野中で1、2年生410人に講演した。

生徒たちが待つ体育館に2人は、輪にしたロープを握り合って走って登場。館内を軽快な動きで一周した。道下さんは「世界の頂点を目指している視覚障害ランナーで主婦をしています」と自己紹介。講演では「できないことに執着するのではなく、できることを見つけて努力することが大事。私は夢を持ち始めて人生が変わった」などと語った。

アイマスクの生徒を導く体験コーナーもあり、生徒は伴走者の的確な助言の大切さを体感していた。